



新春対談

地道にマジメに働く25歳世代 ワーキングピュアと 未来と希望と



連合が結成25年を記念して企画・制作した書籍『ワーキングピュア白書—地道にマジメに働く25歳世代』。「悩みや不安を抱えながらも、地道にマジメにやりがい求めて仕事をする25歳世代の若者」を「ワーキングピュア」と名付け、10人にインタビューした。明らかになったのは、仕事に対する純粋さと、一方でそれを打ち砕くような労働環境の問題だ。長時間労働、サービス残業、低賃金、パワハラ…。未来あるワーキングピュアを使い潰してはいけない。労働組合はどう行動すべきか。小説家の朝比奈あすかさんと神津連合会長が語り合った。



朝比奈あすかさん

小説家



連合会長

神津里季生

—朝比奈さんには、『ワーキングピュア白書』第3章で、映画監督の周防正行さん、元プロ野球選手・監督の古田敦也さんと、鼎談に「参加いただきました」。

神津 『ワーキングピュア白書』は完成に至るまで模索の連続でしたが、朝比奈さん、周防さん、古田さんという、第一線で活躍する方々から「贈る言葉」をいただけて素晴らしい本になりました。心からお礼申し上げます。

朝比奈 私のほうこそ、本当に素敵な体験をさせていただきました。

神津 周防さんとは、法制審議会「新時代の刑事司法制度特別部会」の委員として一緒にしました。2009年に厚労省の村木厚子局長（当時）が、身に覚えのない容疑で逮捕・起訴されるという郵便不正事件が起きました。村木さんは裁判で無罪が確定しましたが、大阪地検特捜部による不正な取調べや証拠改竄が明らかになった。この事件を受けて2011年に設置された特別部会には、捜査関係者や専門家の他に、当事者である村木さん、周防さんをはじめ5人の一般有識者委員が参加することになり、私もその一人でした。2007年に映画『それでもボクはやってない』で痴漢冤罪事件を描いた周防さんは、日本の刑事司法の在り方に強い関心を持って審議に参加していました。「取調べの可視化」が一つの大きなテーマでしたが、捜査関係者の反対

は根強く、5人の一般有識者委員連名の意見書を出したりして議論を前に進める努力をした。3年間の部会において、いわば「同志」のような関係だったんです。

古田さんは、ヤクルトスワローズで長く活躍し、監督も務められた名プレーヤーです。私も、大学や会社（社会人）の野球部でマネージャーを務めた経験があり、プロ野球では自他共に認める熱烈なヤクルトファン。そして何と言っても、2004年にプロ野球選手会が、球界再編問題に対し「12球団維持」を求めてストライキを決定したとき、選手会の会長が古田さんでした。プロ野球選手会は労働組合ですが、ストライキの経験がないとのこと、当時、連合にアドバイスを求めてこれれたという縁もあるんです。

朝比奈 そうだったんですね。ワーキングピュアに贈る言葉として、おふたりのお話は、いい意味で対照的でした。古田さんは、プロ野球選手という目的があつて、そこに向かって緻密に計画を立て努力を重ねていくタイプ。それに対して、周防さんは、今ある仕事に次につながっていくタイプ。ご自分でも「目の前の小さなことをすこく楽しいと思うのが僕の長所なんです」とおっしゃっていましたが、おそらく仕事ができる人は、どちらかなのかもしれないね。そして、私は、「そうはなれな

い25歳もいる」という「落ちこぼれタイプ」として参加させていただきました（笑）。会社を辞めたりして試行錯誤の日々でしたから。

神津 でも、朝比奈さんも、その時代に純粹に仕事に向き合い、自分の生き方はどうあるべきかを考えるという経験がされて、それが今につながっている。そういう意味では「ワーキングピュア」という言葉は、言い得て妙ですね。

仕事が好きで責任ある 仕事も任されているのに

—朝比奈さんは、『天使はここに』という作品で、ファミレスの契約社員として働く22歳の女性を描いています。今のワーキングピュアが抱える問題についてはどうお考えですか。

朝比奈 『天使はここに』の主人公・真由子は、仕事が好きで職場になくはならない存在です。22歳ですが、高校時代のバイトから数えると7年のキャリアを持つベテランで、責任ある職務も任されている。でも、ずっと非正規の契約社員なんです。正社員に推薦してあげると言われながらも、いつも先送りされてしまう。それでも腐ったりせずに「この仕事が好き」だと…。

今、非正規雇用で働く若い人が、ものすごい勢いで増えています。真由子のように、いつか正社員になれること

を夢見て、真面目に仕事に向き合い、仕事を通じて社会とつながることにやりがいを感じている。でも、それがきちんと評価される処遇になっていない。これは、非正規で働いている人たちが問題じゃない、社会全体の問題だと思っています。この本を書きました。

神津 非正規労働者は雇用労働者の約4割、2000万人を超えましたが、特に問題なのは、「初職非正規労働者率」です。社会人として初めて就いた仕事为非正規である比率が、25年前は10%前後だったのが、その後上昇が続いて、今では平均で約4割、女性では5割。初職が非正規だと、正社員にステップアップするのは、かなり厳しい現状があります。

朝比奈 まさに真由子がそうですね。この小説の中で、真由子は最後まで正社員にはなれません。今の日本で書く小説である限り、彼女が正社員になつて、店長になつて…という話にはできなかったんです。

私は、20代の頃、ネットビジネス専門誌の記者をしていたんですが、当時よく取材させていただいたのが、IT関係で起業した人たちでした。立ち上げた会社の株式を上場して一躍億万長者になるというケースも見えました。でも、そうやって手にする億単位の「お金」と、ファミレスで食事を提供して時給で働くというときの「お金」が、とて

現場でも、「社会」というものを感じる場面が乏しくなっているのかもしれないが、もう一步踏み出してみると世界が広がることもある。一つのことに興味を持って踏み込んでいくと、別の何かにつながるっていくことがある。コミュニケーションとは、そういう広がりを持つことが大事だと思うんです。そして、それができるのが労働組合なんです。

朝比奈 確かにそうですね。会社勤めをしていた頃、所属や部署を超えた「誕生会」があったんです。7月には7月生まれの社員全員でランチ会をする。そこから、仕事の評価抜きで悩みを打ち明け合えるようなヨコやナメの関係が生まれました。ワーキングピュア世代は、本人たちは気付いていないけど、実はそういう場を求めていると感じたんです。労働組合こそ、そういう場になれる。ぜひ、ワーキングピュアが参加したくなるような仕掛けや工夫を考えていただきたいと思います。

神津 おっしゃるように労働組合の良さの一つは、そこにある。私自身も、普通に会社の仕事をしているだけなら絶対に知り合うことがなかった人たちと出会い、つながる場面がいくつもありました。人生を豊かにできる可能性を提供してくれる存在です。もう一つ、労働組合は社会に開かれた存在でもある。企業別の組合であつても、賃上げや労働時間の短縮を

要求するときには、社会や経済がどうなっているか勉強しないと、経営者に対しても、組合員に対しても、説得力を持たない。私も、いまだ日々勉強です。―労働組合をPRするために、いいアイデアはありませんか。

朝比奈 ワーキングピュア世代に「どういう人に憧れるか」と聞いたら、テレビに出ている人より、フェイスブックやツイッターとかですごく「立っている人」の日常をチェックしていると言ってます。だから、労働組合の存在をPRする場合も、SNSをうまく使うといいかもしれないですね。振り返ってみると、私自身も、若い頃は自分に自信が持てなくて、何か問題が起きると「自分が弱いから、力がないから」と内向きに自分を責めていました。ブラックバイトやブラック企業は、きつとそういうところにつけ込むのだと思います。だから、労働組合は、「これはおかしい」「こういう逃れ方や闘い方がある」という知識や情報をネットを活用してもっと発信していくべきです。動画やツイッターなど、ネット上でシェアしやすい形になると情報が広がりやすいでしょう。

私も会社勤めの頃は組合員でしたが、「組合費高い」というイメージしかなくて(笑)。でも、こうして労働組合のことを知って、いいなあと思ったんです。だから、例えば派遣労働者が労働組合をつくるような話を書いてみたいなど…。

神津 それはうれしい。日本は、途上国に比べれば、労働組合がつくりやすい国だと思いますが、それでも壁は大きい。経営側からの妨害もあるし、当事者自身の葛藤もある。だから、不満があつても我慢に我慢を重ねている人たちも多いんです。

朝比奈 そういう人たちが立ち上がる話を書きたいですね。

神津 ぜひお願いします。労働組合はいいことをやっているんですが、でも、それを広く知ってもらわなければ、意味をなさない。だから、今、一人ひとりが広報担当者になって、できることは何でもやろうと打ち出しているんです。小説という形で労働組合の姿を伝えていただけたら、本当にうれしいです。

ワーキングピュアに託していく勇気を

―最後に、2016年をどのような年にしていきたいですか？

神津 今年は正念場の一年です。2016春季生活闘争では、「底上げ・底支え」「格差是正」を通して「明日への希望」を実現しようと投げかけています。ワーキングピュア世代も含めて、1年1歳たったら能力も高まって賃金が上がるといふ仕組みを取り戻していく。一人ひとりが、賃金が上がり、生活が良くなつていくことを実感できる社会にしてい

それが今年の最大の課題です。

もう一つ、政治の転換点をつくる上で重要な一年。「上から目線」の政治に対して、生活者・働く者の現実に関点を当てた政治を取り戻していく。そのための「クラシノソコアゲ応援団」ですが、いかにワーキングピュア世代の共感を得て行動できるかがポイントだと思います。

朝比奈 私は、このワーキングピュア世代こそ、日本の財産であり、希望だと思っんです。彼らはコミュニケーション力が高く、繊細な気遣いができて、見栄を張らずに本質を見抜く力がある。日本の未来は、この新しいパワーを持つ人々たちを、どう社会に取り込んで包摂していくのにかかっていると 생각합니다。「マイルドヤンキー」という言葉がありますが、地元で地道に仲間たちと地域を盛り上げながら、一方でSNSを駆使して世界中に友人を持てる人たち。長期的に見たら日本を奥深い豊かな国にするために貢献してくれるでしょう。だから、ワーキングピュア世代に対して、何かを求めたり、うらやんだり、不安に思うのではなく、彼ら彼女らに託していく勇気を持つべきだと思います。―「ワーキングピュア」が2016年の流行語大賞を取れるくらい、社会に浸透するよう、どんどん発信していきたいと思っています。本日はありがとうございました。

【進行／西野ゆかり 連合広報・教育局長】